

詠む広場

毎日俳壇

小川 軽舟選

夜行バス成人の日の夜明け前

秋田市 鈴木華奈子

△評▽夜明けが近づき、もうすぐ目的地に到着する。折しも成人の日。ここから新しい人生が始まる期待感がある。

寒波来てネットサーフィンして饅頭

塩釜市 高橋 永喜

△評▽ネットサーフィンという言葉はもう時代遅れらしい。時代遅れで何が悪いと籠もる。冬帝のマント大きく翻る

香川 川本 一葉

春近き小さな駅の灯りかな

北名古屋市 月城 龍二

冬霧の港見下ろす観覧車

宮崎市 境 雅子

道を掃く僧ふきげんに寒に入る

横須賀市 大塚 正

雪の日や大根切る音煮える音

塩尻市 原田 乃梨

凍てし夜や音の途切れぬシュレッター

野田市 押江 成行

実況のマイク握る手悴みて

東京 崎川 茂行

昨焼けば鴉も煙のそきをり

伊賀市 中森 里江

西村 和子選

雪暗や東尋坊をけづる波

浜松市 久野 茂樹

△評▽雪のために暗くなった空と海上の荒波を描いた、スケールの大きな作品。「けづる」に写生の目が生かされている。

風花のひとつらため息のかけら

大阪 芹澤 由美

△評▽はかなく消えそつな風花を、叙情的な暗喩によって描いた。危ういところが魅力的。てのひらにすくふ光や春近し

岡山市 橋本 幹夫

凍星の下遠さがる杖の音

川崎市 久保田秀司

節分や今を盛りの役者達

大阪市 木挽 弘志

初大師だらだら坂に七味買ふ

奈良市 伊東 勝

しんしんと母なる山の眠りけり

真岡市 小川 充

マフラーを買ふや娘は黒母は白

米子市 永田富雄子

クロッカス祖母に靴紐結びやり

岡山市 沼野大統領

駅頭にコーラス隊や春隣

神戸市 田中 忠士

井上 康明選

決断のはじめの一步寒明くる

川越市 大野宥之介

△評▽誰にも語ることのない決断があったのだろう。寒が明ける日、思い切って初めの一步を踏み出す。「寒明くる」は春の季語。

春めくや仏足石の二十文

明石市 島谷喜代孝

△評▽仏足石は石に刻まれた釈迦の足跡。二十文は50%弱。大きな足跡がいかに春らしい。白梅やいつも短き父の文

加古川市 伏見 昌子

古書選りぬ均一台に春の風

東京 伊藤 公一

立春の光を入れて溶く卵

真岡市 下和田真知子

本箱の著作百点龍太の忌

津市 秋山 歩荷

アフタヌーンティーの甲板鳥帰る

朝倉市 鳥井てんせき

朝刊の届く音あり霜柱

福知山市 森井 敏行

節分会鬼妻まじく美しく

岡山市 三好 泥子

牧舎より牛のこゑする四温かな

浜松市 久野 茂樹

片山由美子選

雲梯の下一面の霜柱

川崎市 久保田秀司

△評▽遊具の下のやわらかい土を持ち上げている霜柱。あまりにもきれいにそろっているので、踏むのをためらったに違いない。

悴むやじやんげんの手のぐうばかり

いわき市 会沢 繁

△評▽じゃんげんのために、かじかんだ手を開くことさえしなくなる。ぐうばかりがユーモラス。雲一つ無くて天皇誕生日

和歌山市 武友 朋子

トンネルを出づれば春の琵琶湖かな

奈良市 荻野 隆子

寒明の波光りをりしづかなり

にかほ市 金 民子

みつめぬることも祈りや冬の月

浜松市 野畑 明子

残すもの何もなき身や冬薔薇

入間市 木嶋 務

春めくや風の匂ひの変はりたる

相模原市 はやし 央

臘夜やシヨールは肩をすべりがち

小平市 齋藤 幸枝

塗り替へを急ぐ遊具や春近し

横浜市 斎藤 山葉

うたは奏でる

時間を見渡す 染野太朗

澤村奇美の第3歌集『竜の眠つてゐた跡』が出版された。前歌集からもう12年も経っている。語るべきポイントはいくつもあるが、今私が注目しているのは例えば次のような歌である。

いつかまた二人に戻る時までの長い時間を歩みはじめ

本歌集には妊娠や出産の歌も多く含まれる。その中で、この歌はすでに子育てを終えたときのことが想像されている。俯瞰で人生を見つめているが、「歩む」という言葉などにうまく情感が乗っているからか、淡々としてたが冷静なだけという印象は受けにくい。むしろ子どもと夫とのこれからの時間をできるかぎり慈しもうという思いこそ感じられる。誤字一字直ししたのみ A勝訴、B敗訴、C和解の予定稿

澤村は新聞社の校閲記者でもある。紙面に掲載するためには、判決が出てから記事を作成するのでは遅いから、あり得る結果を想定してあらかじめいくつかの記事が用意される。それがたつた3通りに収まるのは、裁判や記事としては当然のこと。しかしこれは、そこからほみ出してしまうような、人のいとよみの陰影にあえて意識を向けているからこそ一首なのだと思ふ。

・冬の虹、いますぐ見るとメールするたぶん歩いてあるその人へ
先の2首のような歌をおまえて読むとき、この虹と「いますぐ見て」という思いには特に胸を打たれる。長い時間を見渡す広い視野のなかで、今という一瞬のかけがえのなさがよりいっそう輝く。(そのめ・たろう「歌人」)